

近代のユートピア的コミュニティとその建築的特徴に関する研究（1）

フーリエ主義にもとづく集合住宅の試みについての一考察

印牧 岳彦* 須崎 文代**

A Study on Modern Utopian Communities and Their Buildings: Housing Experiments Based on Fourierism

Takahiko KANEMAKI* Fumiyo SUZAKI**

1. 緒言

産業革命後のヨーロッパ、とりわけ急激な人口増大を被った都市部における労働者の住環境の悪化の問題は、19世紀前半の時期、そうした問題を一種の理想社会の建設によって乗り越えようと試みる思想家や実業家の一群を生み出した。フランスのアンリ・ド・サン＝シモン（1760-1825）やシャルル・フーリエ（1772-1837）、あるいはイギリスのロバート・オーウェン（1771-1858）などに代表されるこれらの理想主義者たちは、のちにマルクス主義の立場から「空想社会主義者（ユートピア社会主義者）」と総称されて批判の対象となるが¹⁾、彼ら自身またはその影響下にある人々による理想社会建設の試みは、たとえ小規模あるいは一時的なものであったにせよ、既存の住宅・都市の問題を乗り越える集合的な生活のあり方を示し得たという点において、現在改めて関心と呼ぶものとなっているように思われる。

本報告では、上記のようなユートピア構想とその建築への影響に関する研究の一環として、シャルル・フーリエの思想（フーリエ主義）の影響下にある建築事例とその特徴を概観する。また、とりわけフランスの事例に関して、2024年3月に実施した現地調査の内容を踏まえてその現状について報告を行う。

2. フーリエ主義とその建築への影響

シャルル・フーリエは、1808年の最初の著書『四運動の理論』をはじめとする多数の著作において、人々のあいだに働く「情念引力」によって結び付けられる（いくらか奇妙な）共同体構想を提示したことで知られる。「ファランジュ」と呼ばれるこの共同体に属する人々が暮らすための住まいが「ファランステール」と呼ばれる建築物であり、1828年の著書『産業の新世界』には回廊によって結び付けられた居住棟からなるその具体的なプランも掲載された²⁾。

フーリエによるこうした共同体の構想は、とりわけ19世紀半ばの時期に国内外に影響を及ぼし、例えばアメリカ合衆国においても

フーリエ主義の共同体の建設が数多く行われた^{3) 4)}。ただし、アメリカにおけるそれが概ね短期間の実験に終わったのに対し、フランスにおいては比較的長期に渡ってコミュニティが存続し、建物としても現存する事例が見られることが注目される。以下では、そうした事例として、パリ市内の集合住宅であるシテ・ナポレオンおよび、北部の都市ギーズに位置するファミリステールの例を取り上げる。

3. フランスにおける事例①シテ・ナポレオン

1851年、ナポレオン3世統治下の政府によって建設された労働者向け住宅であるシテ・ナポレオンは、厳密にはフーリエ主義の建築物というわけではないが、例えば中野隆生は、この建物の以下のような建築的特徴を「ファランステールの要素」として挙げている。「幅六メートルの廊下に見られるごとく、廊下や階段といったスペースが広く、しかも、ガラス天井で覆われていたこと、その階段と廊下をはさんで住戸が二列に向かい合って並んでいたこと、給水泉が大きな中庭におかれ、流しや便所は各階ごとの共同使用となっていたこと、洗濯場、乾燥室、浴室、保育所のほか、暖房付きの集会場といった施設が計画されていたこと」⁵⁾。

パリ市内に現存する実際の建物においては、各住戸の内部に関しては改装工事が進められているものや、既にリノベーションが完了しているものも存在したが、上記で「ファランステールの」として挙げられた要素、例えばガラス天井で覆われた廊下や階段からなる広い共用部や中庭の給水泉、各階の共同便所などは現存しているのが確認され、とりわけ中央の共用空間は各住戸の住人による生活の延長のなかで活用されていることが観察できた。



図1 シテ・ナポレオン、4階共用部（2024年3月、筆者撮影）

*助教 建築学部建築学科

Assistant Professor, Dept. of Architecture and Building Engineering

**准教授 建築学部建築学科

Associate Professor, Dept. of Architecture and Building Engineering

4. フランスにおける事例②ファミリステール

フランスにおけるフーリエ主義の共同体実験としてもっともよく知られるのが、ストーブ製造会社「ゴダン」を経営する実業家のジャン＝バティスト・ゴダン（1817-1888）によって建設されたファミリステールである。ギーズにあるゴダンの工場に隣接して計画されたファミリステールの建物は、1858年から1884年にかけての長期に渡って段階的に建設され、ゴダン自身も含む工場の従業員が最大で1800名程度居住していた。ファミリステールは20世紀に入って以降、二つの大戦も乗り越えて存続したものの、1968年には運営主体である協同組合が解散し、自主管理的な共同体としての活動は一旦の幕引きを迎える。その後、1991年に歴史的建造物に指定されたのち、2000年代以降には段階的に修復・公開が行われ、現在は見学可能な博物館施設として活用されている。



図2 ファミリステール、正面外観および中央棟中庭（2024年3月、筆者撮影）

ファミリステールの位置付けとしては一般的に、フーリエの思想に忠実な実践例と見なされることが多く、例えば前述の中野は「ひとりの産業家がファランステールの居住空間をできるだけ忠実に具体化しようとした事例である」⁵⁾と述べ、月尾嘉男らによる研究でも（フーリエの構想との家族構成などの相違を指摘しつつも）「ファランジュの概念を実現した唯一の成功例」「ファランステールの小型版」と評価されている⁶⁾。

その一方で、白承冠による近年の研究では、ゴダンの思想から建物の特徴に至るさまざまな点において、ファミリステールはフーリエの思想（およびファランステール）の忠実な実践あるいは模倣というよりもむしろ、それらを独自に発展させたものであるという点が指摘されている^{7) 8)}。例えば、白が指摘する建築的特徴の相違点として注目されるものとして、ファランステールにおいてはあらゆる人々が通過可能な回廊（ギャラリー）が全体を結びつける役割を果たしているのに対し、ファミリステールにおいては各住棟の中心にある大きな中庭がその（全体の接続という）役割を果たしているという点が挙げられる。フーリエの建築構想においては、回廊によって象徴される「循環」や「流れ」といったテーマが重要であったとされるが⁹⁾、ファミリステールにおいては、空間構成はより求心的なものとして捉えられていたとも考えられる。

さらにまた、当初ゴダンが協働を考えていたフーリエ主義者の建築家ヴィクトール・カルランが、結局のところファミリステールの計画に関わらなかった理由として、白は両者の建設プロセスについての考え方の違い、すなわちゴダンが（カルランとは違って）建物の漸進的・段階的建設を望んでいたことを挙げている。そうした段階的建設の採用は、ゴダンの現実主義的な考え方に基づくものであり、ファミリステールが長期に渡って存続しえたひとつの理由とも考えられる。とりわけこの点に関して比較可能な事例として、ファ

ミリステールと同様に比較的長期に渡って存続した共同生活の試みといえる、アメリカ合衆国シカゴのセツルメントハウスであるハル・ハウスにおいても、段階的な建設プロセスが採用されていたことは注目される¹⁰⁾。加えてまた、プランに関しても、（修道院がひとつのモデルとなったと考えられる）中庭を取り囲む構成において両者のあいだには共通性が見られる。もとより、地域や機能の異なる二つの建物の比較に関してはより詳細な検討が必要であるが、コミュニティの継続性に関する建築的条件を考える上では、重要な手がかりを提供するものと思われる。

5. 結言

本報告では、産業革命以後の近代におけるユートピア構想の建築への影響およびその特徴に関する研究の一環として、フーリエ主義の影響下にある集合住宅・コミュニティの事例を取り上げ、その現状および特質について既往研究での評価を踏まえた考察を行なった。フーリエ主義者によるコミュニティ建設がしばしば短命のうちに終わったのに対し、ファランステールのな特徴を有するものの、必ずしもフーリエ主義の思想にもとづくものではないシテ・ナポレオンや、フーリエの思想から出発しつつ、独自の展開のもとで実践を行なったゴダンのファミリステールは、今日に至るまでの継続性という点では優れていたと評価できる。また、そうした継続を可能とする上で、建設プロセスの漸進性・段階性が有効に働いたのではないかと推測でき、このことが現在における博物館施設としての段階的な公開・利用へと接続されていると見ることもできるだろう。

参考文献

- [1] エンゲルス、空想より科学へ：社会主義の発展、大内兵衛訳、岩波文庫（1966）。
- [2] シャルル・フーリエ、産業の新世界、福島知己訳、作品社（2022）。
- [3] カール・J・ガーネリ、共同体主義：フーリエ主義とアメリカ、宇賀博訳、恒星社厚生閣（1989）。
- [4] D. Hayden, *Seven American Utopias: The Architecture of Communitarian Socialism, 1790-1975*, The MIT Press (1976)。
- [5] 中野隆生、ブラーグ街の住民たち：フランス近代の住宅・民衆・国家、山川出版社（1999）。
- [6] 月尾嘉男、北原理雄、実現されたユートピア、鹿島出版会（1980）。
- [7] 白承冠、理想的コミュニティーを目指すゴダンのファミリステールについて：19世紀における労働者向けのコミュニティモデルに関する研究 その1、日本建築学会計画系論文集、75(647)、219-225 (2010.1)。
- [8] 白承冠、ゴダンのファミリステールのオリジナリティとその建築・都市史的特性：19世紀における労働者向けのコミュニティモデルに関する研究 その2、日本建築学会計画系論文集、75(654)、2039-2045 (2010.8)。
- [9] 小澤京子、シャルル・フーリエの建築構想における「循環」、和洋女子大学紀要、64、13-27 (2023.3)。
- [10] 井口力哉、須崎文代、印牧岳彦、倉田慧一、田中和幸、水野僚子、泉水英計、《ハル・ハウス》に関する建築史的研究(4)：ハル・ハウスの建築群拡大の変遷、日本建築学会大会学術講演会梗概集 (2024.7)。